発表抄録
構想
2009, volume 8
7 - 8

2010 知能環境論の再構築

半田智久（お茶の水女子大学）
HANDA Motohisa (Ochanomizu University)

1996 年、『知能環境論』を上梓して人間の知的機能に関する環境論的見解を提起した。この視座では知的機能を人間個々の主体の生物心理学的、機械論的な力能のあらわれ (主体が何を経験して、いかなるメカニズムで学習。記憶し、それを基盤に遂行するか) としてみるのではなく、知的機能が発揮される人間の行為の場としての環境の働きとしてとらえる。

この観点の理論的な背景はこれまでに社会的構築主義 (social constructionism) や文化歴史的な活動理論 (activity theory)、あるいは日常生活世界の文脈における実際行為にあらわれる仕方としてエスノメソドロジーなどの考え方に寄り添うものであった。また、世紀をまたいだこの約 15 年の社会動静はインターネットと携帯無線通信の普及によって外在する知のありようの遍在化が著しく進展し、その生態は 20 世紀のそれから質的に大きく変容していく道程であった。なによりも技術革新がつづき、留まらない変化のただなかにある電子メディア (外在知の新たな生息域) の態様と、内在する知と外在する知の通態の場におけるエージェント (その電子メディアを日常文脈上の実際行為として用いているわたしたち) の、日々変化に晒されながらのぎこちなくふためくふるまいは、この先ほどなくしてあらわれるであろう知能環境上の断続跳躍的な進化を予感させるに十分すぎる状況にあるといえるだろう。

ここに 2010 年を期して知能環境論の再構築を構想するのは、あらためてこの革新に向かおうとする潮流のエッジに立ち、人類の知的機能の進化と称しうるような発達的な質的変容を臨みつつの前夜祭的な興奮を感じながら、この動態の様相についての再整理をし、その先へと広がる眺望を得るためである。

前世紀までの外在知の代表的な生息環境は P ブルデューが述べたような制度化された文化資本が築いた壁や枠のなかに物的に行儀よく偏在し、そこで制定される制度の枠組みに保護されながら教授教育的に（つまり、あらかじめメニューに掲げられた内容を教え授けられる単方向的伝達という仕方によって）身体化されていくという閉じた生息域を特徴としてきた。

また、明示的な教育的外在知の環境を包み込むかたちで、その枠外では新聞、テレビ、出版、広告という大規模産業資本を基盤とした限られた数の巨大マスメディア機関による結果的には質的に相同なマスコミュニケーション表現、すなわち基本的には固定化した制作・流通と消費サイドの二元構造において、そこから専ら一方向的に記号を配信する方法による大量生産・大量消費の図式にみあった外在知の偏在した生息環境もとりわけ前世紀後半に確立され、十分に機能してきた機構であった。

現在、その状況が質的変容過程の過渡期にあるのは、主として人口構造・社会構造の変化に伴う制度化された文化資本の制度疲労 (その典型は世界的に進行しつつある高等教育のユニバーサル化) が急速に進行するとともに、情報通信技術の革新とその社会資本整備が進むことによって客体化された文化資本、とりわけそのメディアに関する制作と流通の機構および経済資本上のくびきが崩れ、外在知の偏在を支えてきた境界が融解してエスノメソドロジカルに拡延し、そのヘゲモニーが強まりつつあるためである。わたしたちはその開放情報時空の初発的状況の典型を wikipedia や SNS に認めることができる。

外在知の生息環境の偏在からの遍在への質的な転換はそれと相互作用する内在知の機構を必然的に変化させていく。その内外の知性に交わされる通態的な相互作用は Y エンゲストロームなどの活

動理論でいうエージェントとしてのふるまいそのものといってよい。その行為によって生成されるものごとにこそ、この変容を進化と呼ぶに足るか否かの様態があらわれることになる。もし、この知能環境の質的変容が進化的発達に値するものであるとすれば、現在進行している変化から推測して、おそらくそれはなにやらの階層構造を上昇的に移行していく性質のものにはならないだろう。おそらく進化の動態の主脈は横滑りと跳躍であり、それによって史的に屹立していた多くの壁が乗り越えられたりとっぱられたりして、拡延的に生息域をのばしていく性質のものになると思われる。

なぜならば、旧来の価値観からすれば、価値の希薄なもの、権威 / 権勢なく低次に留まるもの、あるいは場合によっては語るまでもなく常識としてよろしくないといった評価がなされるものや仕方が、知の生息域の拡張によりずっと多種多様な視座が形成されることによって、それぞれの場や状況に応じて価値を生みだし、それがそのまま横滑りして広がり、高低とは異なる次元の観点で、とくに目線にあって十分に馴染み、使いこなすことができ、結果的には共通感覚的によろしいではないかと判断できるような機会が常態化するであろうからである。それは高みの限られた視座から語られる誰かの規範的外在知の伝達を教育的営みの影響下にあって隷属的無邪気に受容してきたこれまでのわたしたちが、主体的な内在知と熱い知をもつ内外通態的な環境エージェントとしてのわたしたちに変容しつつある現下の一様相であるといってよい。

この変化に対応すべく求められている課題は種々あるが、今回の再構築の構想にあたって重視したいポイントを３点あげるなら、つぎのとおりである。第一に、わたしたち自身の行為や社会制度を含めた外在知のアフォーダンスに求められる性質。第二に、電子メディア上に遍在化した外在知を用いるわたしたちの内外通態的な行為にあらわれるエージェントとしての熱い知のありよう、とりわけ電子的に補綴化された知性の生死をまたぐ境界形成をテーマとするエロスの性状。第三は知能環境の内外通態的な生息域において実際行為としてあらわれる想像力と構想力のダイナミズムの態様である。

第一の論点はまだまだ発展途上にある電子端末やアプリケーションシステムにおける操作デザイン上のアフォーダンスといったハード / ソフトウェア上のユーザビリティについての課題から、記号表現におけるデザインのわかりやすさや魅力といった表象表現のアフォーダンスというヒューマンウェア上の課題まで幅広くひろがっている。これらは比較的わかりやすい身近で現実的な課題でありながら、正解のような一元的な解が求めがたい問題としてある。そのため決して容易な課題ではない。しかし、長期的な視野でこれまでを眺めみれば、デザインの実際行為も見る目も確実に多様化すると同時に洗練されてきていることは確かだろう。したがって、このテーマには外在知の遍在化が増すほどに重要性が高まっていく外在知との関係形成における生態研究といった観点から綜合的に接近していく方途がひらけるように思われる。

第二のトピカは知性的な活動において先行的にあらわれだしたサイバーオーガニズムの境界融解現象のなかで、一対無数増殖という圧倒的な不均衡のなかで進行していくサイバー系の増大と、それによる包み込み状態での協同的かかわりのなかで必然的に生ずる個としての疎外が孤独感や仮想的な死の感覚を強めていくであろうことが探究の端緒となる。それが生体にもたらすインパクトと、それに対する無条件反応としての生の衝動がかえってこのあたらしい知能環境における熱い知を力強く駆動していく源泉になるのではないか。そうした仮説のもと、あらたな切り口でのエロス論として知能環境を捉える試みができるようにみている。

第三のトポスでは日常行為の実際において知能環境エージェントのエスノメソッドとなっている想像—構想過程に光をあてる。この場に循環連係的にあらわれるふたつの力の動態モデルを導き出すことは知能環境の代表的な生態モデルを描出することになるという見通しのもとに、内在知について昔から語られてきた理性・知性・感性、あるいは外在知について語られてきた記号・情報・知識の概念整理などを介しながらその内外通態のトポスの性質を探ることになろう。

今般の知能環境論再構築の構想は以上３つのトピカを拠りどころにしながらすすめていく計画である。

2009 年 11 月 30 日　受稿

© The Japan Society for the Study of Initiative 2009